

加島正浩著 『終わっていない、逃れられない——〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読む』

栗山雄佑

本書は、「セクト・ポクリット」での連載「震災俳句を読み直す」、文学通信での連載「震災短歌を読み直す」を中心にした原稿に、改稿を施した上で出版されたものである。著者は「あとがきに代えて」にて、東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の「事故」によって一変した土地で、「震災以前の生活」という「ゴドー」を待ちながら、そしていつまでも現れない「ゴドー」の代わりに「ポゾー」（著者が引用する多田淳之介演出『福島でゴトーを待ちながら』より）を選んだ「当事者」に対し、「歌人ではない文学研究者」として「人文学の領域から（同時代の）社会にどのような貢献ができるのか」と、研究の端緒を記している。その「貢献」の方途を探るための思索の一端を、同じく「歌人ではない文学研究者」である論者も感じ取りつつ、ある一点において本書に深い共鳴を覚えた。

では、本書の内容を見ていきたい。まず、各章の内容について紙幅の関係上、本稿で全て紹介できなかったことを断っておきたい。序章において、著者は本書の目的を「平時において研鑽され

た〈よい歌〉を生み出す技法や基準が、災害時において機能しなくなったとき、俳人／歌人はどのように句や歌を詠むのか。平時とは異なる状況におかれながらも、なぜ、句や歌を詠もうとするのか。句や歌を詠むことでどう〈被災〉を乗り越えようとしているのか。どのような言葉が生み出され、どのような思考が可能になったのか。〈被災〉時に歌を詠むことで何を訴えようとしたのか。あるいは東日本大震災という特殊な災害を詠う際にどのような問題が発生したのか」とあると記す。その上で、なぜ東日本大震災の特殊性に着眼したのか、東日本大震災における〈当事者性〉をどのように位置付けるのか、を提起する。

ここで評者が着目したのが、道浦母都子の歌集『はやぶさ』に収録された短歌に対する著者の言葉である。道浦の短歌は、東日本大震災を広島平和祈念式典、オサマ・ビンラディンの殺害、彼女のチヨルノービリへの訪問と結びつけたものである。著者は、道浦の結びつけに一定の問題性を認めつつも、ここに〈二〇一一年三月一日一四時四六分〉を境に〈なにか〉としか形容できな

いものを失った〈わたし〉が、その〈なにか〉の言語化、あるいはそのことばを模索する〈わたし〉の在処そのものを模索する一途として、「失った〈なにか〉を詠む」、「失った〈なにか〉が詠まれた句や歌を読む」行為に誘われることの重要性を提起する。

この序章において、本書の位置づけは明確に読者へと拓かれていくのではない。東日本大震災、とりわけ本書が着目している福島第一原子力発電所「事故」を経験した〈言葉〉は、震災「以後」から〈なにか〉としか言いようがないものを様々な形で表現しようとし続けている。〈公的な言葉〉が〈なにか〉への想起の方向性を一方的に固定し、暴力的に記憶を忘却することを迫る装置として機能してきた一方で、句や歌、あるいは小説をも抱合した〈私的な言葉〉は、〈なにか〉への徹底的な拘泥を表出しながら、本書のタイトルにある「終わっていない、逃れられない」ものとしての〈なにか〉を、それに憑在された〈わたし〉もろとも表現しようとしてきた。もちろん著者が第六章で指摘するように、文学もまた「なにか」を隠蔽し、忘却することに加担してきたのかも知れない。そのときに、様々な事象と東日本大震災のつながりを詠んだ道浦の短歌、序章冒頭で紹介される伊藤一彦の短歌などは、「平時において研鑽されてきた」〈よい歌〉の基盤をはずれた〈なにか〉を内包しながら、「震災「以後」を延々と生きつづけ」る〈わたし〉のあり方を、読者に提起しているのだ。

この明確な問題提起を踏まえ、本書は「原発「事故」以後の問題とは何か」(第一章)、「事故」以後の福島をどう捉えるか」(第二章)、「警戒区域となったふるさとにどう関わるか」(第三章)、「事故」以後の福島に住むということ」(第四章)、「福島をどう語る

か」(第五章)、「文学」は隠蔽する」(第六章)、「東日本大震災は終わっていない」(第七章)、「忘れたふりをする人たちのために」(終章)、震災歌集および震災句集のリスト、といった構成を取る。なかでも評者が特に惹かれたのは、震災「以後」を描出するなかで立ち現れてくる様々な〈定型〉を、俳句、短歌という〈定型詩〉で打破しようとする俳人、歌人の試みである。

第四章において、著者は東日本大震災以後の文学研究について、先ず小説が、次いで詩に着目がされた一方で、「量的には小説以上に存在している俳句・短歌」に注目が集まらなかったと指摘する。ここに、「俳句は俳人が、短歌は歌人が論じるもの」という「業界のしきたり」の存在を明らかにしつつ、著者は「文学研究者に求められているのは、「良い歌」とされる歌のみならず、そこからはじかれてしまった歌も俎上にあげる」ことであると指摘する。この指摘は、東日本大震災を、原発「事故」を語る「標準語」の暴力性をも明らかにするものではないだろうか。

第五章において、著者は本田一弘『あらがね』に収録された〈被災地とふ言葉があれば被災地とよばれ続けるこれからずつと〉との短歌を基に、「被災地」を含めた「原発「事故」以後の福島を示す言葉」がすべからず「東京が策定」した「標準語」であり、その言葉が「福島を「分断」」していることに、鋭い批判の眼を向けている。この「標準語」の問題については、第六章において中学生が詠んだ俳句を集めた『女川一中生の句 あの日から』において、各句に「前に進まなくてはならない」との〈解釈〉を付した小野智美への批判とも連関する。第五章の最終部にあるとおり、「フクシマ」という言葉も現実と結びついて以上、現実

を変えることなしに言葉だけを消し去ることはできない」。そのとき、〈文学研究者〉に求められるのは、本田が詠うように「あらがねの土の産んだる言葉」を絶えず鍛錬し続ける他にないのだ。

加えて注目したのが、第四章にて紹介される五十嵐進の句である。著者も記すように、〈 $\alpha\beta\gamma$ か奴めこの身に棲みつくか〉には季語は存在せず、〈空を脱ぐ飯豊山腹季語葬送〉は一七音ではない。そのような〈定型〉からの逸脱を試みる五十嵐の句であるが、なかでも〈悼花火おおお涙に声の追いつかず〉との句を以て、五十嵐は東日本大震災の経験が「定型」によつて「理解する／してもらうことが困難」であることを表現しているという。もちろん、著者が述べるように「定型にはまらない」個別の経験は、「人々にとつて理解しやすい「型」を逸脱したものとして、絶えず「捨象されるおそれ」を持つ。しかし、個人の悲しみは時に〈おおおお〉としか言語化できない、つまり泣くという身体反応に「声」という言語表現が追いつかない不如意なものとして表出する。また、その「声」は〈おおおお〉との表記すら不適當な、〈日本語〉での表記が困難なものとして、〈ノイズ〉化する可能性をも持つだろう。このような声を、〈定型〉を逸脱することで表現する試みに、著者と同様に評者もまた、心を惹かれるのだ。

最後に、本書を読みながら評者はある〈既視感〉を感じずにいられなかった。それは、「警戒区域となったふるさとにどう関わるか」、「事故」以後の福島に住むということ」といった本書の章題が、容易に「軍事基地となったふるさとにどう関わるか」、「軍事占領」以後の沖縄に住むということ」と置換できるように、本書が提起している原発「事故」の問題は、沖縄と米軍基地

の問題へと連続する。さらに、本書を読む中で、沖縄の軍事占領を語る「標準語」に抗うウチナーグチ（あるいは「シマクトウバ」）での表現、そのウチナーグチすら攪乱する〈ノイズ〉としての他国語などの様々な観点が、福島と沖縄が抱えることになった問題の連続性としてあらためて眼前に現れてきた。福島から、沖縄から立ち現れてきた〈なにか〉としか言いようがないものは、読み手を、聞き手を揺動させ、それに囚われた〈わたし〉もまたかつての〈わたし〉でいられない。第七章で著者は、「震災を目にした際に何かを「聞いてしまった」ために、『想像ラジオ』を「書いてしまった」いとうせいこうを紹介するが、著者も、評者も、福島から、沖縄から〈なにか〉としか言いようがないものを「聞いてしまった」がために、文学研究者として〈なにか〉の言語化を試み続けている。それは、〈私的〉な動機であつて、〈文学研究〉の「定型」から逸脱するものなのかもしれない。だが、〈震災後文学〉、〈沖縄文学〉なる〈文学研究〉が定めた「定型」が、いかなる声を黙殺し、その「定型」の範疇でいかに作家、作品を扱い易い〈題材〉として消費してきたか。その欲望を再考し、ときには「定型」を攪乱することで新たに見えてくる〈なにか〉を追いつけることこそを、評者は〈文学研究〉と呼びたい。その一途として、本書が提起する問題意識は大きな意義を持つ。

二〇二四年九月三〇日 文学通信 二二四頁 一九〇〇円＋税